

エコロジカル・デモクラシーから見た「ミズベリング樋井川」の展開

九州産業大学 学生会員 山中仁志

九州産業大学 山下三平

1. はじめに

(1)背景

福岡市を流れる 2 級河川樋井川の沿川地域では、2009 年の豪雨により中下流域で氾濫が発生し、家屋が浸水するなどの被害を被った。これを受けて、福岡県は床上浸水対策特別緊急事業の河川改修を行った。しかし 2009 年の樋井川の氾濫は都市型水害である。市民協働で多様な流出抑制を行うことが本質的な対策である。このための市民協働を促すプラットフォームとして、水害から 3 か月後に「樋井川治水市民会議」が発足した。さらに 2016 年には、より日常的な取り組みとして流出抑制を実施するコミュニティとして「ミズベリング樋井川」が設立された。

ところで、地域コミュニティの形成と都市の形との相互作用を考えるのに、エコロジカル・デモクラシーというデザイン思想がある¹⁾。これは米国のランドスケープ・アーキテクトである R.ヘスターが実践を通して見出した都市の 3 つの形態と 15 の原則から成るのである。

都市型水害対策には、水循環の健全化とコミュニティの再生とが不可欠であり、そのための方法を考え、実践する必要がある。

(2)目的

そこで本研究では、エコロジカル・デモクラシーの視点から「ミズベリング樋井川」の活動の評価を行い、今後の活動について考察することを目的とする。

2. 方法

(1)エコロジカル・デモクラシーの 3 つの形態と 15 の原則

エコロジカル・デモクラシーは、「可能にする形態」、「回復する形態」、および「推進する形態」という、それぞれ人間の居住に関する 3 つの形態を扱い、それらには 15 のデザイン原則が含まれる (表-1)

15 の原則は、地方、都市、町から、街区、曲がり角、庭、住宅に至る様々なスケールのランドスケープのデザインを実践するための命題を構成している¹⁾。

表-1 エコロジカル・デモクラシーの 3 つの形態と 15 の原則

3 つの形態	15 の原則
可能にする形態 都市とランドスケープを人々が活動できる場所とし、人々がそれほど親しくない隣人とも互いに知り合いになり、困難な問題を解決するために共に活動できるようにする形である。	中心性—センター
	つながり
	公正さ
	賢明な地位を追求する
回復する形態 都市とランドスケープを自然と結び付けることで災害など様々な衝撃に堪え、またそこから回復することができるようにする形	聖性
	特別さ
	選択的多様性
	密度と小ささ
推進する形態 都市とランドスケープを魅力的なものとし、喜びによって前に進むことができるような形である。	都市の範囲を限定する
	適応性
	日常にある未来
	自然に生きること
	科学に住まうこと
	お互いに奉仕すること
	歩くこと

15 の原則の中で最も重要なのは「聖性」である。表-1 の黄色色で示されている 4 つの原則は、聖性に深く関わる原則で、それぞれの結びつきも強い。この 4 つの原則は、コミュニティ生活の本質ともいえる¹⁾。

(2)研究の方法

ミズベリング樋井川は、主に九州の大学と市民の協働を促す「あまみず社会研究会」のアウトリーチ活動と位置づけられ、水循環の健全化とコミュニティの再生に取り組むプラットフォームである²⁾。そこには「ミズベリング樋井川会議」、「学習会」および「樋井川さんぽ」というような活動が含まれる。著者らはそれらの参与観察を行い、記録をとっている。これをエコロジカル・デモクラシーの 15 原則の視点から見て活動の位置づけを行い、その課題について考察したい。そのためにまず聖性および関連する 4 つの原則との対応を検討する。つづいて他の原則について考察を行う。

3. 結果

(1)ミズベリング樋井川の変遷

ミズベリング樋井川会議は 2016 年 4 月から 2020 年 12 月までに 43 回行われている。参加人数は 10~30 名である (図-1)。毎年 7 月 7 日の「水辺で乾杯」に加え、会議前に川遊びや川掃除を行う「樋井川さんぽ」を実施し、川をより身近に感じられる活動が含まれるよう工夫をしている²⁾。

毎回の会議の中の「学習会」では、2020 年は、ため

池、地区防災計画、身近にある生物多様性など様々な分野の内容で専門家による講演が行われ、意見の交換と協働のための連携が行われている。なおその拠点となる施設は民間の「公民館」ともいえるべき「樋井川テラス」²⁾である。

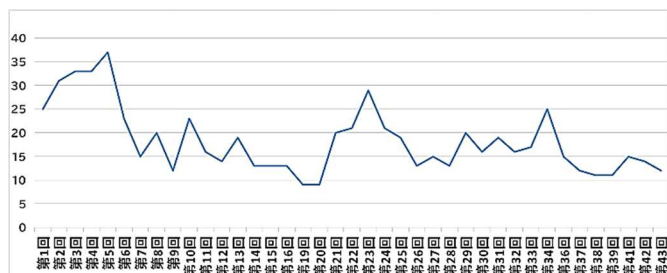


図-1 ミズベリング樋井川会議の参加者の推移

(2) エコロジカル・デモクラシーの原則から見たミズベリング樋井川の活動の位置づけ

a) ミズベリング樋井川と聖性および密接な 4 つの原則

樋井川流域の「聖性」は水循環で表象されると解釈できる。水循環は、流域を限定し、重層する歴史をはぐくみ、沿川にコミュニティの結節点を生み出す。また、流域を超えた外との連携を誘導し、大自然・命そのものの営みにも連なることを教えるからである。「中心性—センター」は樋井川テラスと雨庭憩いセンターが代表する。これらはまた上記の沿川のコミュニティ活動の拠点となる場所である。「つながり」は全国のミズベリング²⁾との連携と、同じ拠点で異なる活動をする団体や新規の参加者と既存の参加者が活動を共有することで表現される。「特別さ」は樋井川の歴史・地理・文化を知ることによって生み出されつつある。災害の履歴と「樋井川村」の記録や、残存する古地図や地名を、流域に新しく住み始めた人々と再発見することで育まれている。「都市の範囲を限定する」は樋井川の流域界である。この流域は約 29.2 km²で福岡市域に納まる。上流域が油山の緑・市街化調整区域で限定されている。コンパクトで全体像を把握しやすい構造である。

以上の原則と連関を流域住民・関係者の間で自覚的に共有する機会を増やすことで、エコロジカル・デモクラシー的な社会が持続・発展するであろうと考えられる。

b) ミズベリング樋井川に見られるその他の原則

図-2 と表-2 は、をエコロジカル・デモクラシーの視点から見たミズベリング樋井川の活動を、さらに全体の連関を踏まえて表すものである。

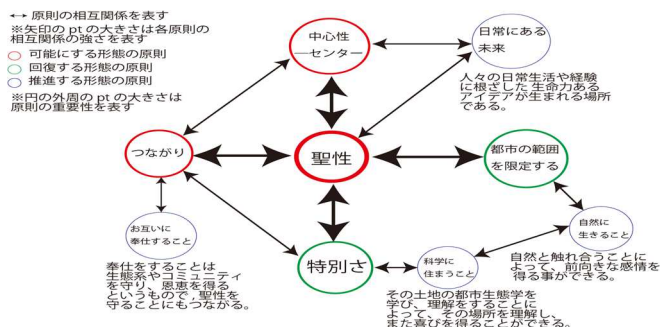


図-2 ミズベリング樋井川の活動の位置づけ

表-2 ミズベリング樋井川の活動と関連する原則

ミズベリング樋井川の活動と説明	関連する原則	ミズベリング樋井川の活動と説明	関連する原則
ミズベリング樋井川会議 ミズベリング樋井川会議に参加している団体や個人の活動報告や話題の共有などのことが主に行われる。	日常にある未来 活動の報告や話題や共有の中で活動に生きているような地域に根差したアイデアが生まれやすくなる。	樋井川さんぽ 樋井川流域、または支流の流域など散歩をしながら、生物観察、川遊び、川掃除を行う。	自然に生きること 樋井川さんぽで行う川遊びや生物観察を通して、自然の中で遊ぶ楽しさを知り、自然とふれあふれ合うことに対して前向きな感情を得ることにつながる。
学習会 山、川、海の団体の活動紹介、企業の技術、ため池、防災計画、身近の生物多様性など様々な分野について講演を行い、内容についてのディスカッションを行う。	科学に住まうこと 学習会では、活動に生かせる都市生態学の知識を学ぶいい機会となる。またそれは、その他の樋井川の活動を通して、理解を深め土地の知恵を学ぶことに発展する。	川掃除 川掃除は樋井川さんぽと一緒にされる。場所は流域、河岸を利用した広場などである。	お互いに奉仕すること 川掃除という奉仕をすることで、樋井川の生態系とコミュニティを守ることにつながる。また奉仕は、多様な公共の利益を生む。

「科学に住まうこと」は樋井川テラス（「センター」）での「学習会」で充足している。その内容は樋井川の自然をまず体験し、「自然に生きること」を感覚した上での理解を助ける。「樋井川さんぽ」の川掃除は、老若男女が一緒になって水と自然に触れ、川の汚れを認識し、改善を自分たちで行うことで、「お互いに奉仕すること」の実践となる。「センター」での「ミズベリング樋井川会議」によって、川と水の大切さを常に確認し、過去と現状と将来を見通すことで、「日常にある未来」に気付き合うのである。

4. おわりに

ミズベリング樋井川には、コミュニティ生活の本質ともいえる聖性および密接な 4 つの原則が含まれている。これを自覚的に共有する機会を増やすことで、エコロジカル・デモクラシー的な社会が持続・発展すると考えられる。また、活動に関係するさらに 4 つの原則が、活動の現状と将来を考えることを促していることが確認される。

今後、この構造がどのように持続または変化するかについて、引き続き追跡することが重要である。

参考文献

- 1) エコロジカル・デモクラシー まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン 著者 ランドルフ・T・ヘスター 訳者 土肥真人 鹿島出版会 2018
- 2) 新澤泰史:「ミズベリング樋井川」の特徴と活動の効果について 九州産業大学論文 2019